

## 秋吉帯雁飛山地域の地質と放散虫化石

## Geology and radiolarian fossils of the Ganbisan area, Akiyoshi terrane, Southwest Japan

# 亀高 正男 [1]

# Masao Kametaka[1]

[1] 産総研・地質情報

[1] Geol. Surv. Japan, AIST

秋吉帯は西南日本内帯に点在しているペルム紀後期の付加体である。山口県西部の秋吉帯は、秋吉台を形成する秋吉石灰岩と、その南側に太田層群、北側に別府層群のチャートおよび砕屑岩が分布し、西側に主に砕屑岩からなる常森層群が分布している。秋吉石灰岩は石炭紀～ペルム紀中期の海山であり、太田層群と別府層群は石炭紀～ペルム紀後期の海山縁辺の海洋底堆積物、常森層群はペルム紀中期～後期の海溝充填堆積物と考えられる。太田層群については、放散虫化石による層序の検討や堆積環境の推定がなされている (Uchiyama et al., 1986)。一方で、別府層群は高橋ほか (1967) 以降本格的な調査がなされておらず、最近の研究は皆無である。そこで、別府層群分布域の西部にあたる雁飛山地域において、地質調査ならびに微化石の抽出を試みたのでその結果を報告する。

雁飛山地域の別府層群のうち西畑から西寺にかけては、閃緑岩の貫入による接触変成作用を被っており、スカルンが形成されている。チャートは一般に塊状無層理で、石灰岩 (大理石化) を伴い、様々な層準にチャート角礫岩・チャート石灰岩角礫岩・石灰岩礫岩などが挟まれている。チャートは珩長質凝灰岩に漸移する。砕屑岩は主に塊状の泥岩からなり、泥岩は時に砂岩や珩長質凝灰岩を挟む。雁飛山南麓のチャートから *Pseudoalbaillella* sp. aff. *P. longicornis* などが、珩長質凝灰岩から *Pseudoalbaillella yanaharensis*, *Follicucullus monacanthus*, *Follicucullus scholasticus* などが、泥岩から *Pseudotormentus kamigoriensis* などが産出した。雁飛山北麓の珩長質凝灰岩からは *Pseudoalbaillella yanaharensis* などが得られた。これらの放散虫化石はペルム紀中期～後期の最前期の年代を示す。海綿骨針はチャート・珩長質凝灰岩・泥岩のいずれからも産出し、monaxon が最も多く、tetraxon が次に多く、trioxon や rhax を伴う。海綿骨針は Demosponge から多くもたらされ、Hexactinellid も存在していたことがわかる。

高橋ほか (1967) は雁飛山地域の地質構造について低角～中角にチャートと砕屑岩が累重するとしており、今回の調査結果はこれを支持している。高橋ほか (1967) は、これらが全て正常層であるとしている。ところが、雁飛山南麓の泥岩-珩長質凝灰岩-チャートの層序は、秋吉帯の復元された海洋プレート層序 (Kanmera et al., 1990) に照らし合わせると、低角で逆転しているように見える。また実際に、雁飛山南麓には底角で逆転した級化構造を示す砂岩泥岩互層がある。一方で、岡田南方においては中角南傾斜で正級化を示す砂質泥岩が見られる。このように、本地域の地質構造は難解であり、さらに慎重に調査を進める必要がある。